

英語教材として文学作品を活用した授業実践

ヘミングウェイの『雨の中の猫』に見られる大学生の解釈の多様性

松浦 加寿子

1. 研究背景と目的

平成 30 年に告示された高等学校の学習指導要領の外国語科の目標に掲げられている外国語学習で育成する能力には、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の 3 つがある。とりわけ、3 つ目の「学びに向かう力、人間性等」の目標は、「外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的、自律的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う」と明記されており、文学作品を鑑賞することは、作品の背後にある文化の深い理解を促進し、現代社会に対応できる豊かな人間性を養成できるといえる。さらに、教材の配慮事項としては、「多様な考え方に対する理解を深める」「豊かな心情を育てる」と記載があり、文学作品が英語教育に寄与できると考えられる。そこで、本研究は、文学作品の英語教育および現代社会における役割を再考することを目的とし、アーネスト・ヘミングウェイの短編作品『雨の中の猫』（1924）における解釈の多様性について分析・考察した。

2. 先行研究

授業で文学作品を扱う意義に関して、佐々木（2017）は文学が人間力を涵養することを指摘し、久世（2019）は文学を英語教材として扱う意義として、「言語に関する意義」「感情や人間形成に関する意義」「文化に関する意義」「その他の意義」の 4 つを挙げ、多様な言語活動、人間形成や異文化理解力、解釈する力や創造力を涵養することを主張している。一方、『雨の中の猫』を用いた授業実践に関しては、杉村・工藤（2018）は、『雨の中の猫』における指示対象や解釈に関わる事前課題を設定し、大学生のことばの意識づけの一端を示すことで、英語教員が多義性に富む文学テキストを活用することの重要性を主張している。さらに、安田・轟（2020）は、『雨の中の猫』の読解作業の感想と英語の授業で文学作品を使用することに対する感想を求めた結果、英語教育における文学作品の英語素材としての可能性を示唆している。以上を踏まえて、ヘミングウェイの『雨の中の猫』に見られる曖昧性について、大学生の解釈を KH Coder の共起ネットワークや KWIC コンコーダンスなどを用いて分析し、考察することで、文学作品の英語教育および現代社会における役割を検討した。

3. 研究方法

授業実践者は、2021 年度から 2023 年度にかけて「英語文学概論」「文学」「専門英語文献講読」の講義を担当し、履修者 50 名を対象に、本授業実践を 2022 年、2023 年、2024 年の 1 月中旬に実施した。ヘミングウェイの『雨の中の猫』を選定した理由としては、1100 語程度の平易な文章で読みやすく、内容が興味深いこと、さらに多様な解釈を引き出すことができる点が挙げられる。

授業実践者は、調査対象者が作品を読む前に、「猫」の特定化、タイトルにおける“cat”のシンボル、アメリカ人妻の“something”の特定化とアメリカ人妻の願望の 4 つの観点から設問を提示し（下記設問 1~4）、解釈を求めた。また、2023 年度生には、より解釈を見極めるためにエンディングの創作（下記設問 5）を課し、一週間後に提出させた。

1. 最初にアメリカ人妻が見た猫と最後にメイドが持ってきた猫は同一か？
2. タイトル“Cat in the Rain”の“cat”は何を象徴しているか？
3. “Something felt very small and tight inside the girl.”とは具体的に何か？
4. アメリカ人妻が本当に欲しかったものは何か？
5. エンディングに続けて 10 文以上創作してみよう。（英語でも日本語でも可）

本授業実践は、①ヘミングウェイに関する説明、②発問、③内容把握、④発問に対する回答、⑤ディスカッション、⑥解説の順に実施した。

4. 結果と考察

設問 1 の猫の特定化に関しては、諸説ある（今村, 1990; 浅若, 2008; 田中, 2020 他）が、大半の調査対象者は最初にアメリカ人妻が見た猫と最後にメイドが持ってきた猫は違う猫であると解釈していた。根拠としては、アメリカ人妻が見た猫は「子猫」と描写されていたが、メイドが持ってきた猫は「大きな三毛猫」と描写されていたこ

とによる英語表現の違いが主に挙げられていた。また、アメリカ人妻は子猫を見つけることができなかったが、三毛猫はメイドに抱かれていて人慣れしているように見えることも指摘されていた。さらに、三毛猫はほぼ雌猫である（浅若, 2008）が、最初の猫は「子ども」と解釈し、最後の「大きい三毛猫」は雄猫で、「支配人」の比喩と解釈した調査対象者や、夫が変化していった様子を表現していると捉えた調査対象者も見られた。一方で、同一の猫と回答した調査対象者は、テーブルの下にいた猫は、小さく見えただけであると解釈していた。

設問2のタイトルにおける“cat”のシンボルに関しては、「妻」と回答した調査対象者が多数いた。雨の中、テーブルの下で縮まっている猫に妻の境遇を重ね合わせていることが推察される。また、妻が子猫を保護しようとしたことから「子ども」と解釈した調査対象者も見られた。

設問3におけるアメリカ人妻の“something”の特定化に関しては、多くの調査対象者が「小さくて固いもの」をホテルの支配人への恋心と解釈しており、根拠としては、支配人に対して“like”が多用されていたことが挙げられていた。また、ヘミングウェイが私生活で恋愛遍歴が多いことを踏まえて、「恋心」と解釈した学生が多いと推察される。さらに、今村（1990）が指摘しているように、「子ども」と解釈した調査対象者は、ヘミングウェイの子どもが誕生した翌年に出版された短編小説であることを根拠として述べていた。以上のことから、ヘミングウェイの私生活が調査対象者の解釈に影響を及ぼしたことが考察される。

設問4のアメリカ人妻の願望に関しては、夫からの愛が最多であり、子どもや子猫、支配人、自由、夫との離婚など多様な回答が見られた。ここで、『雨の中の猫』を通して、登場人物のウェルビーイングとジェンダーを検討したい。夫婦の互いの態度や気持ちや妻と支配人、メイド間の互いの態度から夫婦の今後についてウェルビーイングとジェンダーの観点から論じることができる。さらに、猫に関しては野良猫や保護猫の問題に発展させることが可能である。

2023年度生にのみ課した設問5の創作に関しては、主に猫を受け入れ、夫婦円満になるなどの幸せな結末と夫ジョージに対する不満から別れを彷彿とさせる結末に大きく二分された。結末に続けて創作させることで、特に調査対象者の設問1, 3, 4の解釈がより明白になったと考える。

5. まとめ

本研究では、ヘミングウェイの短編作品『雨の中の猫』の読解を通して、様々な英語表現に着目することで、英語力向上を図るとともに、各調査対象者が導き出した解釈の多様性を分析した。文学作品を通して、登場人物の気持ちに寄り添い、現代社会で注目されているウェルビーイングやジェンダーの問題について取り組むことで、より深い作品理解を促進することが期待できる。本研究の発展には、今後も文学を通して、解釈する力と創造力の指導を継続し、その分析からより多くのエヴィデンスとデータを蓄積することが必要と考えられる。

<テキスト>

Hemingway, Ernest. (1998). *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway: The Finca Vigía Edition*. Scribner's.

参考文献

- 浅若裕彦 (2008). 「『雨の中の猫』の中の三毛猫」『大谷学報』第87巻, 第2号, 18-29.
- 今村楯夫 (1990). 『ヘミングウェイと猫と女たち』新潮選書.
- 久世恭子 (2019). 『文学教材を用いた英語授業の事例研究』ひつじ書房.
- 佐々木徹 (2017). 「今、日本で、英文学にどう取り組むか?」『教室の英文学』, 日本英文学会（関東支部編）, 研究社.
- 杉村寛子・工藤多恵 (2018). 「短編小説‘Cat in the Rain’についての大学生の解釈の分析」『大阪電気通信大学人間科学研究』第20巻, 33-47.
- 田中江扶 (2020). 「‘Cat in the Rain’のCatに関する一考察—なぜタイトルのCatは無冠詞なのか—」『信州大学教育学部研究論集』第14号, 160-173.
- 安田優・轟里香 (2020). 「英語学習における英語文学作品の有用性—学習者の視点から—」『北陸大学紀要』第48号, 77-89.
- 文部科学省 (2018). 「【外国語編 英語編】高等学校学習指導要領解説」
https://www.mext.go.jp/content/1407073_09_1_2.pdf (最終閲覧日: 2024年6月10日).